「９月は征圧月間」愛知県がんセンター丹羽総長に聞く

研究所併設の強みを生かし「膵臓癌腫瘍マーカーの発見を目指す」

日本人の２人に１人ががんに罹患し、年間40万人近くが亡くなっている。死因の１位を譲らない、がんの封じ込めは可能なのか。研究所も併設するがん診療の拠点、愛知県がんセンター（名古屋市千種区鹿子殿）ではより良い治療法を探りながら専門医らが日夜、患者と向き合っている。がんの中でも特に早期発見が困難な上、死亡率が高い、膵（すい）臓がんの診断の役に立つ指標の発見を目指しているという。９月は「がん征圧月間」。同センターの丹羽康正総長に現状と治療、研究の成果などを聞いた。

（編集顧問　中原道文）

丹羽総長は最新のがん研究について大きな希望を語った。「膵臓がんについて、研究所と病院の消化器内科部が一緒に研究しています。今、コラボしてバイオマーカー（疾患の有無や、進行状態を示す目安となる生理学的指標）といいますが、血液で分かる腫瘍マーカーのようなものの発見に取り組んでいます。先日、話を聞いたところでは、見込みがあり有望だと感じました。全ての人に血液検査をやるわけにはいきませんが、膵臓がんのリスクの高い人を対象に早期診断が可能になるのではと期待しています。膵臓がんを何とかしようと全国で取り組んでいますが、画期的だと思います。近く成果が出ることを期待しています」。

膵臓がんの診断が血液検査で判定できる手法が見つかれば、早期発見が期待でき、致死率の低減に大きく貢献できる、夢の発見と言えそうだ。

丹羽総長によると、がん自体は全国的に右肩上がりで増加。国内のがん罹患数（2018年）の順位は総数では１位が大腸がん、２位以下は胃がん、肺がん、乳がん、前立腺がんの順。がん死亡数（2019年）では男性は１位から肺、大腸、胃、膵臓、肝臓の順で、女性は大腸が最多で、以下肺、膵臓、胃、乳房の順。男性の罹患数は１位が前立腺だが、血液検査で早期発見、進行が遅いこともあり治療が可能で、死亡数では５位にも入っていない。

膵臓がんによる死亡数は全国で４番目（女性は３位）と多く、新たな脅威ともいえるかもしれない。

「今は膵臓がんが大きな問題で、罹患率はあまり高く出てこないのですが、亡くなる人が多いのは早期の段階で見つけにくく、進んだ状態で見つかるからです。糖尿病の人で急に血糖値が悪くなった人を調べてみると膵臓がんだったというケースもあります。検診では腹部超音波検査などがありますが、体の真ん中にある臓器なので全体を画像で見るのは難しく、なかなか異常を見つけにくいのです。ただ、超音波やＣＴで膵嚢胞（すいのうほう＝膵臓の中にできる内部に水成分などを含んだ袋状のもので、炎症性、腫瘍性など各種）が偶然見つかることがあり、がんとの関係も分かりつつあります。膵嚢胞が見つかると超音波内視鏡で精査・経過観察します。体外式腹部超音波検査ではガスで見えにくい部分もありますが、超音波内視鏡では内視鏡を十二指腸や胃内へ挿入するのですべての膵臓を観察することができます。ただ専門施設でないと超音波内視鏡検査は行われないので、検査対象者などは研究中です」と丹羽総長。

愛知県がんセンターで診療しているがんの種類は2020年度でみると、消化管（食道がんなど）29％、乳がん18％、肺がん17％、肝・胆・膵がん2％、頸頭部が7％などとなっている。

センターのがん治療の成果について丹羽総長